

すまいる通信

Vol. 10

2020(令和2)年3月発行

障がい児者福祉施設協議会 広報紙



春のしらべ

表紙の写真を「すまいる通信」のタイトルにちなみ、会員施設・事業所の皆様から笑顔の写真を大募集。七施設から十三点のご応募をいただきました。その応募作品の中から選ばれたのは、「社会福祉法人鶴翔会 障害者支援施設ゆきわり荘」の作品です。また、惜しくも大賞は逃したけれど、寄せられた素敵な笑顔の写真も紹介いたします。(五ページ)

〈写真の説明〉

ほかほかお散歩日和だったので、園庭で皆さんと日向ぼっこ。

春の訪れを感じました。

被写体

伊藤 敦子さん(写真右側)

手代木里美さん(写真左側)

二人からのコメント

「選ばれてびっくりしました！ありがとうございます！」

今号の 主な内容

「福島地域福祉ネットワーク会議」

(二～三ページ)

「農福連携を行ってみて」利用者側面から」

(四ページ)

「各委員会活動報告」

(六ページ)

福島地域福祉ネットワーク会議

社会福祉法人しのぶ福祉会
あづま授産所

まつさき
松崎
てつや
哲也

厚生労働省が呼びかける「縦割りから丸ごとへ」という福祉の変革に対し、地域で活動する小規模法人[※]がネットワークを組み、協働で課題に対応できる体制を作ろうと活動を始めました（福島市補助事業）。高齢者、障がい者、子どもと分割されている福祉の垣根を超え、お互いの活動を理解しあうところから課題を共通認識化。持てる力や資源を活かし合うことで、個別の支援活動ではアプローチできなかった複合的な課題や、福祉の隙間に落ち込んでしまった人への働きかけに結び付けたいと考えています。

ワーキンググループでの意見交換

四月の発足以降、障がい者支援、高齢者支援の現場からの声を共有するワーキンググループを実施。地域包括支援センターにもご意見を賜り、参加団体が日常の業務の現場で感じている地域課題を提示し合っています。

障がい者支援のワーキンググループでは、精神障がい者の自立生活援助や金銭管理、移動支援、引きこもりなど多岐に亘る課題について意見が交わされました。地域で活動する民生委員さん等との情報連携が求められること、縦割りの壁や旧来の理解に基づいた制度を超える支援の必要性があることなど、複雑多様化する課題解決に向けた様々なヒントが得られました。

高齢者支援のワーキンググループでは厚生労働省の

認知症予防研究結果について話題提供され、運動や食事の大切さ、地域活動への参加など、様々な指標に基づいた検証が共有されました。少子高齢化の顕著な農村部では免許返納による移動の困難や高齢独居が深刻化する一方です。八〇五〇問題のように高齢者福祉と障がい者福祉、自立支援策を連携させて関わるべきケースも増えています。障がい者同士の結婚や出産、子育て支援も丸ごとサポートの対象となります。地域福祉を担っている団体がスキルやノウハウを提供し合い、住民参加での「支え・支えられる関係」を作っていく必要があります。

活動に地域の行政区が加わっているのも大きな特徴で、例大祭などの伝統行事や景観形成等の地域活動にも参加。顔が見える関係づくりからの課題抽出を進めています。



ワーキンググループでの意見交換

参加し合うことの意味

縦割りを越えた活動にはお互いの活動に参加し合う等、区分局を超えた理解が肝要です。就労継続支援B型施設に通う方が他施設のイベント運営にも参加するなどオープンな交流機会を作るように心がけています。これまで

クロージドで実施されてきた児童養護施設のイベントに他の施設やボランティアグループが積極的に参加。家族的雰囲気生活する子どもたちの生活を垣間見ることで理解が促進されました。普段はサポートされる側の利用者が施設の製品やサークルの手作り品を紹介し、軽食をふるまうことで、子どもたちや来場者に喜んでもらえる嬉しさを共有することが出来ました。障がいの有無、年齢の枠を超えて、お互い様・お陰様の気持ちが芽生え、これを



地区の伝統行事「例大祭」

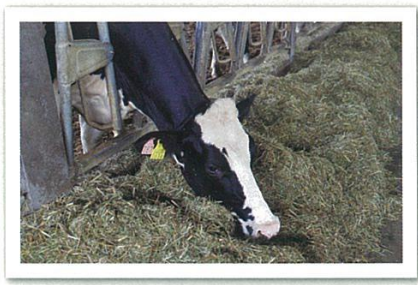


就B利用者による「たこ焼」の振る舞い

地域の支え合いに還元したいという目標が確認できました。イベントに関わる人々が自己肯定感や自己有用感を高め、多様な活動に参加する楽しさに気づき、地域に関わることにやり甲斐を感じてもらえたようです。二年ぶりに開催された「ニュースカイアグリ」実行委員会にも参加。福島の名誉市民である室屋義秀選手も参加。航空ショー目当てに県内外から集まった多くの人々に、福祉事業所の個々の活動や当ネットワーク事業を紹介することが出来ました。

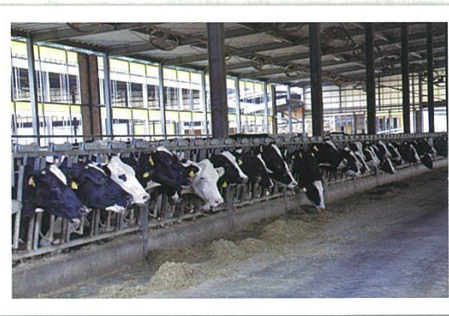
社会福祉法人による公益的取組のきっかけに

福島地域ネットワーク会議の事務局がある「土船地区」に、「株式会社フェリスラテ」があります。大震災後、原発災害避難で休業となつてしまった飯館村の酪農家の方々が、飯館村酪農の復興を目指し法人化したもので、福島畜産業の復興のシンボルとなっています。そこで飼育される乳牛の飼料の一部にニンジンが使用されるようになり



ました。ニンジンと言つても、購入した商品ではありません。社会福祉法人しのお福祉会の就労継続支援B型事業所で作業している「ニンジン」の皮むきへたカットで廃棄するしかなかったニ

ンジンの「皮とへた」です。作業で出されたニンジン「皮とへた」を、その日のうちに牧場に運び、出産のために搾乳を休んでいる乳牛の飼料に混ぜて与えているのです。ペータカロチンは、牛の繁殖と胎児に良い効果があると言われております。当ネットワークに参加する団体の方が、ニンジン作業で出る皮とへたの使い道があるのでは」と疑問に思つたことがきっかけでした。すると、食品ロス、食料リサイクルという社会問題を意識するようになり、食料や野菜の残菜を家畜の飼料としてリサイクルする「エコフィード」というものが活用されていると知ることになったのです。福島地域福祉ネットワークの繋がりの中から、フェリスラテさんとしのお福祉会の接点ができました。今では、毎日二百キロ程出る「ニンジン」の皮とへたは、ゴミではなく「エコフィード」に生まれ変わり、無料で乳牛のもとに届けられています。フェリスラテ、飯館村という復興の大きな流れの中に、しのお福祉会の地域貢献策も含まれていくことは素晴らしいことだと思えます。



多様な接点づくりをめざして

年度後半は、福島市の市民活動フェスティバルへの参加で、専門性を持つ福祉事業者と市民活動、ボランティアとの協働の接点を模索。児童福祉や地域課題のワーキンググループを続け、様々な活動主体同士の接点を増やしていきます。

高齢・障がい・子どもと三つに分かれている福祉を横につなぎ、それぞれの専門性と気づきをベースに関わるタイミングと頻度を上げていく…。そこに、社会貢献を目的とする企業や退職者の地域参加を促していく…。誰かが必要としている福祉的なサポートは、やがて誰もが必要とするサポートでもあります。「丸ごとの福祉」を念頭に、関心と関わりの範囲を柔軟に広げていく先にこそ、誰でもが暮らしやすい「地域」の将来が見えて来るのだろうと考えています。

取材協力：福島地域福祉ネットワーク会議
事務局 吉野 裕之 様

※参加団体

社会福祉法人福島敬香会、社会福祉法人しのお福祉会、社会福祉法人青葉学園、NPO法人福島・伊達精神障害福祉会、NPO法人まごころサービス福島センター、NPO法人シャローム、一般社団法人シャローム福祉会、合同会社社楽購、ボランティア団体すけつとくらぶ、土船区

農福連携を行ってみて、利用者の側面から

特定非営利活動法人 みんなのまーち
ゆめのまーち

しんかい
新貝 典史
のりお

私たちが農福連携として福島県授産事業振興会から打診を受けたのは昨年四月のことでした。郡山中心部より南東方向に位置する障害福祉サービス事業所ゆめのまーちは就労継続支援B型事業所として設立し一〇周年を迎えました。隣に同B型事業所はなまーちと今年二月から稼働し始めた同B型事業所にじのまーちができ、作業を増やしたいと考えていました。

そのような時、JA全農さんから依頼を受けた福島県授産事業振興会を通じて農福連携のお話を頂きました。研修等で農福連携の話は聞いていましたが、五月から実際作業を行ってみると農業に携わったことが無い利用者も職員も不慣れな環境から、なかなか作業がはかどらず、軌道に乗るまで時間がかかりました。

五月から始めた農作業は十二月下旬まで行いました。作業内容はねぎの収穫のお手伝いで利用者三名と職員一名が一ユニットとして現場に向かいました。郡山南東部に畑がいくつかあり、郡山市内の事業所数か所がシフト制で作業を行いました。ゆめのまーちは月曜日と火曜日の午前、金曜日の午後の週三回のシフトが割り当てられています。基本的に外の農作業なので生育状況によりますが、天候に関係なく作業を行います。

昨年は自然災害も多く、夏の猛暑では暑さ対策も行いましたが、三十分毎に休憩を入れなければならぬほど過酷なものとなりました。台風被害について



畑は被害にあわず、通常通り行うことができましたが、雨が降ると畑のぬかるみが酷く、ねぎを運び出すのも大変な状況でした。

そのような七か月間、農福連携に実際に作業に携わった利用者さんに感想を聞いてみました。

○Mさん(二十七歳男性)

「五月からのねぎの収穫は作業所内の作業より楽しく、かごに入れたり、ねぎを束ねる作業を行っていました。大変だったのは雨が降ってぬかるんでいたことで、台羽を着て頑張りましたがびしょびしょになってしまいました。十月の台風も大変だったです。ねぎを束ねる作業などやると慣れることができました。外に行けることはちょっとだけ楽しいです。農園の従業員の人も仲良くできています。」

○Sさん(四十四歳女性)

「ねぎの収穫は楽しいです。事業所内の作業も畑の作業も好きです。カゴにねぎを入れて運ぶのが楽しいです。鎌は危ないので使いませんでした。週三回の作業は大変で、特に暑い日はTシャツやタオルを準備しました。農園の人達は挨拶をしてくれます。毎回トイレに行きたくなります。職員に相談してトイレに行かなければならないのでトイレが近くにあるといいなと思います。」



○Wさん(二十歳男性)

「五月の初めは疲れてしまいました。慣れたら力がついてきて、頑張れるようになりました。農園の人達とは挨拶をしたり、声をかけてくれます。ねぎの収穫は難しくはないです。ネットでくるんだり、鎌で刈り取ったり、周りのみんなで分担作業を行っています。ねぎの種類は一本ねぎ、青ねぎ、薬味ねぎに分かれていて、毎回違うところで収穫します。大変な時は夏でした。暑かったのと雨が降った後、ぬかるんでしまうと足が動きにくくなり大変でした。」

農福連携の機会を得ることで、次のようなプラスの側面がありました。

- ① 働ける機会が増える
- ② 施設外就労による工賃の向上
- ③ 社会参加への実感

事業所だけでは仕事を探すことが難しく、創出もままならない現状があります。また施設外就労ということで利用者さんの工賃が一・五倍に上がった方もいました。さらに利用者さんが社会とつながっているという感覚がより鮮明に感じられました。

働くことでより社会とのつながりが深まれば農福連携の可能性はまだまだ広がっていくと思います。



笑顔の写真ありがとう

今号でも「すまいる通信」の「すまいる」にちなみ、会員施設の皆様から写真を大募集しました。選考を行った調査広報委員会でも意見が分かれるなど力作が勢ぞろい。惜しくも表紙は逃したけれど、寄せられた写真の中から素敵な笑顔を紹介いたします。ご応募いただいた皆様、本当にありがとうございます。



夏祭りの屋台ごはん「おいし〜」



紙を上手に貼りましょう。どこに貼るのかな？



「じゃがいもとれたよ〜！」
借りている畑での一コマ 収穫に満面の笑顔です



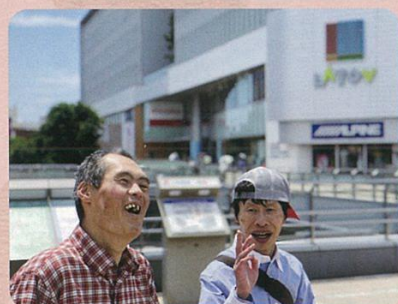
「お祭り最中にはいポーズ！」
「あづま祭」で模擬店コンクールの真っ最中。
テーマを「ハローウィン」とし、利用者さんと職員一丸となって販売に励み、優勝しました。



ありがとう
「スーパーイオンで
イエローシートキャンペーンの一コマ」



「おら、東京にいくだ!!」



「電車、見てきたよ〜！」



アサヒビール園で焼き肉
11月の秋晴れの中、みんなの希望で、本宮市の
アサヒビール園に行き、焼き肉を食べ、
楽しみました。



七夕合唱
七夕の行事の際、音楽クラブの皆さんが、
“七夕”を合唱し、それに合わせてみんなで歌いました。



「今日はコーヒーだ！イエーイ!!!」
コーヒーが大好きな利用者さんとの2ショット。
利用者さん:「今日コーヒー!？」
職員:「コーヒーですよ!」
利用者さん:「やったあ!!!」



「おみくじ楽しいな」
施設行事でおみくじを作り、楽しまれている様子の1枚です。



各委員会活動報告

研修委員会

一月二十八日に「様々な障がいを抱える方への対応研修」として東京慈恵会医科大学の井上祐紀先生を講師に迎え、一〇四名の参加で開催されました。

午前は「敵ではない」と思われるようなかかわり方の対応についての講義、午後はグループワーク「ストレングス（強み）トーク」で、内容も良かったと評価を頂きました。

委員会では講師選定の作業だけでなく、皆さんと各施設の情報交換もでき、意義ある委員会活動になったと思います。

施設長 薄上 亮一
うすがみ りょういち
 (社会福祉法人 西会津町授産場)

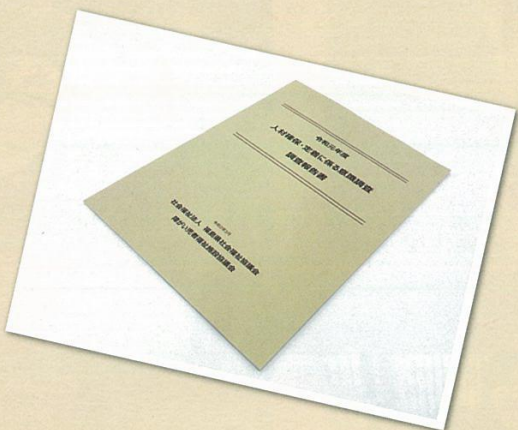


調査委員会

少子高齢化が進む中、福祉の職場ではサービスを提供する人材の確保・定着が急務の課題となっています。今回は平成二十六年度に実施した「人材確保・定着・養成等に係る意識調査の追跡調査も兼ね、介護・福祉分野における大きな課題解決の手助けになればと考え、会員施設一七八施設を対象に調査を実施しました。

今回の調査結果が一人でも多くの人材確保につながり、「働きやすく、やりがいのある職場づくり」のお役に立てれば幸いです。

所長 角田 純子
つのだ すみこ
 (社会福祉法人 いわき福音協会 光の家)



広報委員会 & 編集後記

今回の「すまいる通信十号」では、社会福祉法人等公益法人に求められている「地域における公益的な取り組み」について、福島市内で行われている取り組みのほか、社会福祉事業と農業の連携が近年多くなってきた中で、郡山市内の事業所で行われている一例をご紹介します。たださました。

今回ご紹介させていただいた内容が、今後の福島県内の障がい児者支援の発展一助になれば幸いです。

援助員 小林 さおり
こばやし さおり
 (社会福祉法人 福島県社会福祉事業団 福島県さびたき寮)

